

表現力の育成に向けた言語活動のあり方

—学級活動と教科（音楽科）における言語力の向上に着目して—

M13EP005

佐野 良彦

1. はじめに

現行学習指導要領においては思考力・判断力・表現力の育成が重視され、その実現のためには言語活動の充実が必要とされている。しかし、ただ書かせたり話し合わせたりするだけでは言語活動とは言えず、思考力・判断力・表現力は育成されない。言語力（文部科学省言語力育成協力者会議，2007）の向上をめざした言語活動を行うことが重要になってくる。

しかし、言語活動はすべての教科等において充実させることが求められているものの、実際は教科や活動の間で相互に意識されながら取り組まれているとは言い難い。

本研究では、表現の手だてとしての言語力に着目する。そして、言語力の基本である国語科の指導内容を参考にし、学級活動での日々の振り返りと音楽科授業での音楽的な感受および表現の工夫のなかで、事実や〔共通事項〕(学習指導要領に示された音楽を形づくっている要素)の働きや変化についての気づきと考えを言語でどのように伝えていくかについての方法を検討する。

2. 先行研究

音楽科授業としては、三村（2009）による音楽科授業における言語力についての研究、斉藤（2009）による音楽科授業における言語活動の役割と授業構成についての研究、および桂（2009）による子ども自身の音楽表現を生み出すことと密接にかかわる言語使用の具体例を示した先行研究がある。

しかし、学級活動と音楽科授業の双方から言語力の向上について検討した先行研究は、

筆者の知る限りでは見られない。

3. 研究の目的

学級活動および教科（音楽科）において、言語力向上をめざした言語活動を取り入れることが教科（音楽科）における言語による表現力の育成につながるという仮説を立て、それを検証していくことを研究の目的とする。

4. 研究の方法

- (1) 表現力の育成につながる言語力について、文献等から明らかにする。
- (2) 学級では生活記録ノートにおける記述を、また、音楽科授業では鑑賞（聴取）や表現の工夫における記述をもとに、教師の働きかけによってどのように言語力が向上したかを検証する。

5. 研究の結果と考察

(1) 文献等から得られた知見

① 言語力について

言語力について、文部科学省言語力育成協力者会議（2007）は、「知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とのコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力を意味するものとする」としている。

言語力という言葉は、「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」（文部科学省，2012）（以下、指導事例集）や「中学校学習指導要領解説音楽編」（文部科学省，2008）の中では用いられていないが、自分の考えを深めたり表現したりするために事実や考えたことなどを言葉で表現したり他者と伝え合ったり

する力と定義し、本研究では、個人で考えを深めたり表現したりする内容に限定する。

②学級活動における言語力

指導事例集では指導に当たっての留意点として「事実等を解釈し、説明することにより自分の考えを深めること」などを挙げている。

この指導のあり方を具現化するための学級活動における言語活動として考えられるのは、生徒による生活記録ノート(以下,生活記録)への記述である。その理由として、生活記録の自由記述欄は日々のできごとを振り返るために用いられ、事実にもとづいて自分の考えを述べることにふさわしいからである。

つまり、学級活動で生活記録を使用する際に、自分がどのような事実から何を感じたのかを明らかにしたり事実をもとに自分の考えを深めたりすることによって言語力が向上し、文章による表現力が育成されたとと言えるだろう。

③国語科における書くことの指導

佐藤(2012)は、「自分の考えを理由をつけて具体的に書くことができること」への授業改善の方策を提示している。その方策とは、教師が集めた説明的な文章をいくつか生徒に提示し、文章の構成パターンのどれに該当するかを発見させた上で、自分がまねたい構成パターンを選ばせるというものである。その構成パターンの1つに「具体的事例(事実)→具体例のまとめ(意見)→結論(意見)」があり、生活記録の記述の方法として応用することができる。

④音楽科における言語力と表現力

三村(2009)によれば、音楽科授業における言語力には学習手段としての言語力と音楽科固有の言語力(音楽リテラシー)があり、相補関係にあるという。楽曲を聴いて〔共通事項〕の働きや変化を知覚し、曲想を何らか

の形で感じたとしても、その内容を意識化したり、表現したりするためには言語力が必要である。また、いかに言語力があろうとも、その楽曲を特徴づけている〔共通事項〕の何を知覚し、そこからどのように感受できるのかは音楽科授業でしか学習できない。

津田(2012)は、音楽科における言語力にかかわる表現力として、「思いや意図を表す力」を育むことが「歌唱、器楽、音楽づくりで表す力(いわゆる〈音楽〉表現力)」を高めていくと述べている。つまり、鑑賞領域で感じ取ったことを言葉で表したり、表現領域で思いや意図を表す力を言語活動によって育んだりすることは、言語力を高めるだけではなく、表現技能習得への意欲を喚起し、歌唱や器楽、音楽づくりにおける表現力を高めることにつながると言える。

三村(2009)の音楽科固有の言語力と津田(2012)の〈音楽〉表現力の向上について詳細に検証することは本研究の範囲を超えているが、音楽科授業における言語力についてまとめると、図1のようになる。

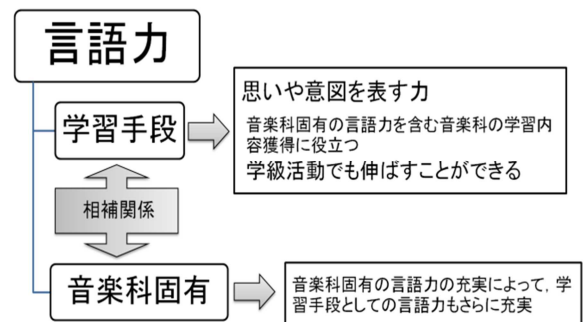


図1 音楽科授業における言語力
(三村(2009)をもとに作成)

このように、思いや意図を表す力は学習手段としての言語力と同様に考えることができ、学習手段としての言語力は教科固有ではないことから、学級活動においても育成できることがわかった。

①から④までの考察から、表現力の育成につながる言語力として、図2のようにまとめることができる。

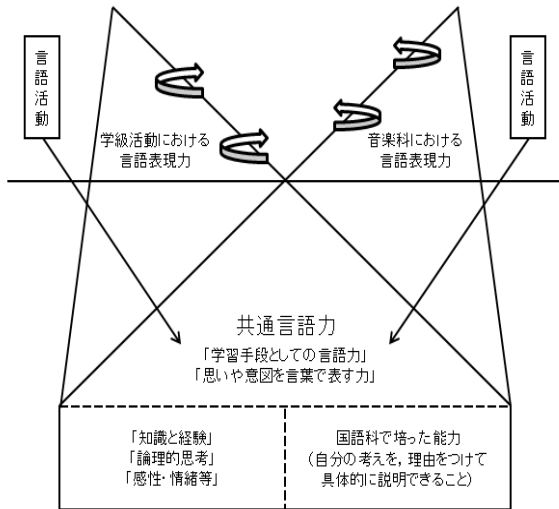


図2 表現力の育成につながる言語力 (氷山にたとえた言語の表層面と深層面 (Cummins & Swain, 1986) をもとに作成)

⑤言語活動を取り入れた音楽科授業

斉藤 (2009) は、言語活動を取り入れた音楽科授業の授業構成について、『『経験→振り返り』という構造をもち、言語活動は『振り返り』に含まれる。言語活動を行うことによって、経験は意味をもったものとなり、子どもの音楽認識が発展する』と述べている。

〔共通事項〕の働きや変化を知覚する活動や、そのことによってどのようなことを感受したかを考える活動は、何度か聴いて、その度にその楽曲ではどのようなことが起きているかという事実を見つけ出したり、どう感じたのかを振り返ったりすることが言語活動として必要になってくる。また、楽曲をよりよく表現するためには、どのような思いや意図からどのような工夫をしたのか、その結果自分たちの表現がどのように変化し、その結果は自分たちの思いや意図に沿うものなのかを、やはりその度に振り返らなければならない。つまり、〔共通事項〕の働きや変化について言

語活動によって振り返ることは、その楽曲へのさらなる理解や表現の工夫へとつながっていく。

このように、〔共通事項〕は表現と鑑賞をつなぐ役割も担っていることから、授業を構成するにあたり、〔共通事項〕を用いた言語活動による振り返りを取り入れることが重要であることがわかった。

斉藤の提案する授業構成をもとに、本研究において明らかになった知見をふまえ、言語活動を取り入れた音楽科の授業構成をまとめると、次の図3のようになる。

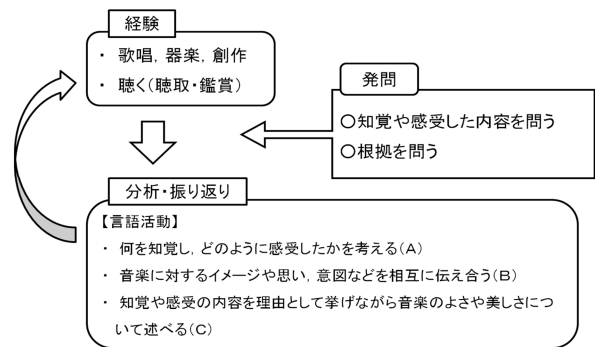


図3 言語活動を取り入れた授業構成 (斉藤 (2009) をもとに一部改変)

また、生活記録と音楽科授業での言語活動がどのようなかわりをもっているかについて、指導事例集の内容と対応させてまとめると、表1のようになる。

表1 言語活動のかかわり

	生活記録	音楽科授業	指導事例集
①	事実	何を知覚したかを考える。	事実等の正確な理解
②	感想(自分の考え)	どのように感受したかを考える。	自分の知識や経験と結びつけて解釈
③	まとめ	音楽のよさや美しさについて述べる。	自分の考えをもつ

(2) 学級活動における実践

①実習の概要

実習は甲府市立α中学校の3年A組で、期間は5月から12月まで、週1回行った。始業前の活動、朝の会、音楽科授業、給食、清掃、帰りの会を観察した。実習校では、生活記録ノートとして「School Life (株式会社 新学社)」(図4)を使用していたが、生徒と学級担任とのやりとりに介入することを避け、記録欄のみを抜き出し、「School Life mini」
として研究のために別に記述を依頼した。

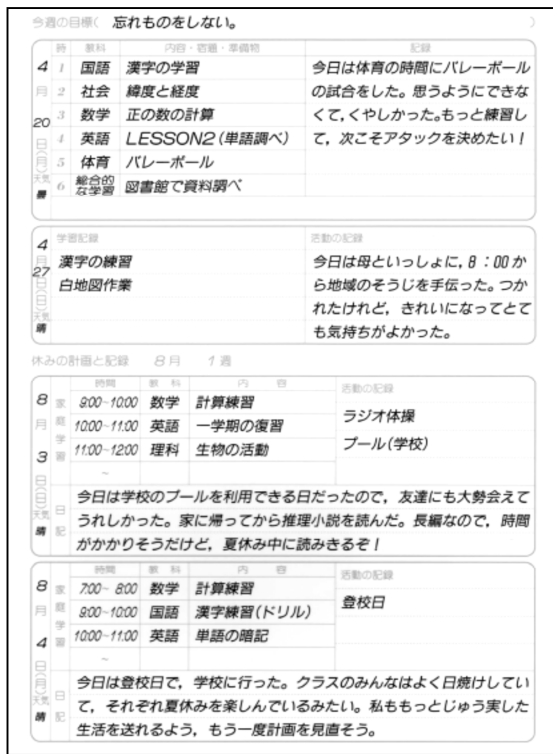


図4 「School Life」の記入見本

②学級活動における言語活動

下の表2は、実習を通して「School Life mini」の記述に対して働きかけた内容と、働きかけた条件を満たした記述ができた生徒の割合(達成率)をまとめたものである。

表2 「School Life mini」における働きかけ(全9回)

月日	働きかけ(条件)	達成率
6/6	何も投げかけない	—
6/27	内容は自由、2文(事実+感想)	97.1%
7/4	2文以上(事実+感想)	94.4%
7/8	2文以上でできるだけ具体的に(事実+感想)	89.2%
8/29	朝の体力づくりの長縄について(原因+結果)	59.5%
9/5	学園祭への学級の取り組みについて(事実+自分の考え+まとめを意識)	81.1%
9/26	学園祭を通して成長したと思うこと(事実+自分の考え+まとめ)	64.9%
10/10	自由に何かを伝える(事実+自分の考え)	91.9%
10/31	合唱交流会の他のクラスの合唱で参考になったこと(事実+感想または自分の考え+まとめ)	58.8%

表2を見ると、8月29日、9月26日、10月31日の記述で条件を満たした生徒の割合が低いことがわかる。原因としては、これらの時期は学園祭や合唱祭へ向けて取り組みをしている時期であることから、生徒たちにとっては書きたい事実や考えが明確に意識され、手順を意識することよりも書きたい気持ちが先行したと考えられる。条件の提示が、より伝わりやすい記述にするためであったことを意識させるべきであった。

(3) 音楽科授業における実践

①実習の概要

実習は学級活動と同じ甲府市立α中学校の第3学年3クラスで行った。5月から9月上旬までが観察と補助、9月中旬から11月中旬までが授業実践、11月下旬から12月までが観察となった。ここでは学級活動の実習を行った3年A組での授業実践をまとめた。

②音楽科授業における言語活動

題材名は「曲想を生かし、思いを込めて表現しよう」で、題材の目標は「歌詞の内容や音楽を形づくっている要素の働きから、各場面の特徴や曲想が理解できる」「各場面の曲想の変化を生かし、思いや意図をもって歌唱表現を工夫することができる」「曲想の変化が豊かに表現された楽曲を、音楽を形づくっている要素の働きと曲想とのかかわりを理解して、よさや美しさを味わって聴くことができる」である。上記3つの目標を達成するための手だてとしての言語活動を、A～C(図3の対応)として場面設定した。ただし、前述のように、本研究はあくまでも個人の段階での言語力を対象としているため、相互に伝え合う言語活動Bは考察から除外した。

表3と表4は、それぞれ、指導計画と言語活動の位置づけをまとめたものと、言語活動A、Cでの具体的な働きかけをまとめたものである。

表3 音楽科授業の題材と指導計画

第1時	①「聞こえる」の各場面のもととなった出来事を知る。 ②各場面をどのように表現すればよいかを考える。
第2時	①聴取教材において、曲想と音楽を形づくっている要素のかかわりを聴き取る。(言語活動A) ②「聞こえる」の各場面における曲想の変化を表現するための思いや意図をもつ。
第3時	①グループで意見交換をしながら、思いや意図が伝わるように練習する。(言語活動B) ②曲想を生かした合唱をする。
第4時	①グループごとに表現を磨き、発表する。 ②ベートーヴェンの交響曲第9番の成り立ちや楽曲の構成について知る。 ③「歓喜の歌」を鑑賞する。(言語活動C)

表4 各言語活動場面での働きかけ

A	〔共通事項〕の働きや変化を聴き取ってキーワード化し、曲想にどのような影響を与えているかを具体的に記述させた。
C	「School Life mini」と同様に「事実+感想(自分の考え)+まとめ」の書き方を意識して記述させた。

本題材の言語活動の総括とも言える言語活動Cの場面で、「School Life mini」を使用したA組と使用しなかったB組の記述について比較すると、表5のような結果となった。

表5 言語活動Cにおける記述内容の比較

	A組	B組
事実+感想+まとめ	35%	29%
事実+感想	51%	27%
事実	14%	44%

言語活動Cの場面において、事実のみしか書けなかった生徒は、A組の方が少なかった。このことは、知覚した〔共通事項〕の働きや変化という楽曲のなかでの事実を、曲想などの感受という感想に結びつけて書いているとことができ、「School life mini」の使用が音楽科授業における言語力の向上に一定の役割を果たしたことが検証された。

(4) 具体的な記述についての分析

「School Life mini」での働きかけによる記述の変化と音楽科授業の言語活動場面での記述について、学力や音楽経験が対照的なS生とM生の2名を抽出して分析した。

S生は、学力は上位だが、部活動や家庭での音楽経験は特にない。学校生活全般に前向きに取り組み、級友から信頼されている。M生は、学力は振るわないが、学級合唱のピアノ伴奏をするなど音楽経験が豊かで、本人も自信をもっている。ただ、昨年度までは

「School Life」も授業でのワークシートもほとんど記述ができていなかった。

①S生（男子）

ア. 「School Life mini」の記述

（6月27日）

今日のテストは、少し点数がどうなるか心配です。しかし明日にはまた他教科のテストもあるのでがんばりたいです。

（10月31日）

今日の合奏交流会では、きょうして、テンポがはやくなりました。これから残り日数を有効に使って、また、他のクラスから来た強弱のこともしっかりとつけていきたいです。

6月にくらべて10月は、「テンポがはやくなってしまった」と具体的な記述が見られるようになるとともに、記述量も増している。

イ. 音楽科授業の記述

（言語活動A）

キーワード	速さ、テンポ
曲の雰囲気とキーワードとのかわり	最初はテンポがゆっくりで、何の舞いの曲かと思ったら、かどらうの切れ目から、音が急に高くなりテンポははやくなり大騒ぎのようなもの思われました。

テンポの変化を知覚し、「大騒ぎのようなものを思われた」と感受した内容を伝えることができている。

（言語活動C）

これは、楽器が中心になって、音が入ってきたから、声も強くなるのだ。強弱をしっかりと、一部は、ノックした人が早くて音が盛れると、全量、声も上がり、声も、かきと大きくなって、盛れると、これは、テンポが速く、これ、切れ、工夫が凝らされていると思った、盛り上がる時は、この、持っている音が、声も、楽器が、これ、主張する様に、歌、ぼり、な、お、カ、ス、ル、ズ、こ、し、か、音、を、大、き、い、に、か、き、か、した、歓、喜、の、こ、と、に、つ、い、て、声、と、樂、器、を、混、せ、合、わ、せ、て、上、手、に、主、張、さ、れ、る、思、わ、れ、た、お、と、増、が、合、わ、せ、た、い、い、曲、だ、と、思、う、同、じ、歌、詞、の、お、と、も、以、上、が、違、う。

「盛り上がる場所は、テンポも速くなっている」と〔共通事項〕であるテンポが変化していることを理由に挙げながら、「わくわくした」と感受した内容を記述し、楽曲のよさについても「歓喜のことについて、（中略）上手に主張されている」と記述している。また、記入欄を目一杯使って記述している。

②M生（女子）

ア. 「School Life mini」の記述

（6月27日）

テスト1日目です。少し緊張。でも、明日もテストがあるので頑張りたい。

（10月31日）

強弱は、歌っている方が、歌っている人よりも、聞き手よりも、伝わりやすいように、歌っています。弱く歌うときは、少し、歌い手が、強さを、保ち、たい、と、思、い、ま、す。

記述量が増している。「強弱は、歌っている方はつけているつもりでも、聞いている人にはあまり伝わらない」と、踏み込んだ感想が記述できるようになった。

イ. 音楽科授業の記述

（言語活動A）

キーワード	テンポ
曲の雰囲気とキーワードとのかわり	

テンポの変化は知覚できているが、テンポがどうなっているかだけでも聴いてみようという機間指導をして言葉かけをしたにも関わらず、具体的な変化や曲想は記述できていない。

（言語活動C）

XとYの強弱は、強、弱、の、こ、と、を、分、け、ま、す。

強弱の強弱は、強、弱、の、こ、と、を、分、け、ま、す。

強弱の強弱は、強、弱、の、こ、と、を、分、け、ま、す。

強弱の強弱は、強、弱、の、こ、と、を、分、け、ま、す。

強弱の強弱は、強、弱、の、こ、と、を、分、け、ま、す。

まずは頭に思い浮かんだ曲想をメモしてから、教師が提示した曲想の変化を考えるためのキーワードと結びつかを考えてみてはどうかと助言したが、強弱の変化について若干触れることができただけである。多く記述できることがねらいではないが、記入欄の多くを残してしまっている。

③具体的な記述についてのまとめ

2人とも、「School Life mini」においては記述量が増し、具体的な内容や自分の考えが記述できるようになっていることから、「事実＋感想（自分の考え）＋まとめ」という視点によって、学級活動において言語表現力が高まったと言える。

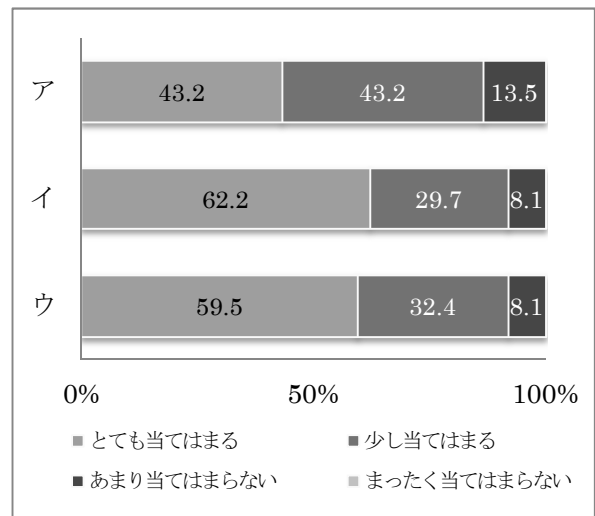
音楽科授業においては、S生とM生では大きな差が生まれてしまった。S生は、「School Life mini」の記述と同様の視点を持ちながら聴いたり表現の工夫を考えたりすることで、聴き方や文章記述などに改善が見られた。特に言語活動Cの場面では、何を知覚してどのように感受し、その結果としての楽曲のよさを自分の言葉で記述することができている。しかし、M生は言語活動Cの場面ではほとんど何も記述できていない。M生は、「School Life mini」の視点をもった記述の取組を通して学習手段としての言語力は身に付きつつあるが、音楽科固有の言語力がまだ身に付いていないためだと思われる。

④終了後の生徒の意識

実習終了後、「School Life mini」と音楽科授業において、「事実、感想（自分の考え）、まとめ」という記述方法の視点をもって取り組んだことに対して、3年A組の生徒に以下の調査（表6）を実施した。

表6 実習後の意識調査結果

	質問内容
ア	条件を意識しながら書くと、生活記録は書きやすくなったか
イ	生活記録で条件を意識しながらこれからも書いていくと、自分の考えを表しやすくなると思うか
ウ	生活記録で条件を意識して書くことは、音楽科授業で音楽的な感受や表現の工夫を書くときに役立つと思うか



※ いずれの項目に対しても「まったく当てはまらない」と回答した生徒はいなかった。

表6を見ると、「とても当てはまる」と「少し当てはまる」の合計の割合が、アは86.4%、イとウは91.9%であることから、多くの生徒が今回の実践の意味を理解し、記述の条件提示に対して概ね肯定的に受け止めていることがわかった。

自由記述には以下のようなものがあった。

- ・ 自分の気持ちを文字で伝える技術がより身についたと思う。(S生)
- ・ 「第九」の感想をワークシートに書いたことで、音楽に対する感じ方や表現の表し方がうまく書けるようになりました。
- ・ (生活記録を) 毎回書くことによって音楽の授業での鑑賞が書きやすくなった。どのように、何を書いたら良いのか明確に分かるようになった。
- ・ 文章が思いつかないときに、「事実＋感想＋まとめ」で書くと、書きやすくなりました。
- ・ 音楽の鑑賞において、今までは思ったことをどんどん書いていたが、「事実＋感想＋まとめ」の書き方をしたら、何を書いたらいいのかわかった。
- ・ 自分の思ったことを言葉にしやすくなった。

これら自由記述の内容を見ると、多くの生徒が、「事実、感想（自分の考え）、まとめ」という視点は、どのように記述すればよいかという方法として有用であると認識していることがわかる。また、生徒は、言語力の高まりを実感し、その高まりが生活記録と音楽科授業の双方の記述によい影響を及ぼすと捉えている。

6. おわりに

ここまで、言語力に着目し、学級活動と音楽科授業において「事実、感想（自分の考え）、まとめ」という視点をもって言語活動を取り入れる研究を進めてきた。

この視点をもつことで、生活記録と音楽科授業双方において記述が充実し、生徒自身も書きやすくなったと実感している。このことは、学校生活での気づきや考えを表現するための言語力も、音楽科授業での感受や工夫における気づきや考えを表現するための言語力も、共通した言語の用い方をすることで、ともに伸びていくことを示している。音楽科授業において〔共通事項〕の働きや変化を感じ取って言語で表現する力は、音楽科授業の限られた時数のなかで工夫を重ねて身につけていくことはもちろんだが、生活記録への記述を日々積み重ねていくことがその助けとなるのである。

今後は、学級活動において、記述できた内容を伝え合うことで望ましい人間関係に生かす活動や、さらに自分の考えを深める活動のあり方を考えていく必要があるだろう。

音楽科授業においても、何を知覚し、どのように感受したかということが表現に向けての出発点であることが再認識された。また、表現への思いや意図を言語で表す力が、音楽科固有の言語力によってどのように〈音楽〉表現力へ結びつくかということも重要な課題である。知覚や感受に焦点を当てた教材研究とともに、言語力を実際の〈音楽〉表現力に

どのようにつなげていくかについては、次年度の課題としたい。

7. 参考・引用文献

大熊信彦(2012)「音楽教育における学力をどう捉えるか」中等教育資料 平成24年12月号 学事出版 pp.58-59

笠井健一／水戸部修治／津田正之／白旗和也／弘前大学教育学部附属小学校・編著(2012)「授業における『思考力・判断力・表現力』－学力を伸ばす言語活動－」東洋館出版社 pp.18-23

桂直美(2009)「音楽科教育における言語教育の方法」日本教育方法学会編「言語の力を育てる教育方法」図書文化社 pp.71-82

斉藤百合子(2009)「音楽科授業における言語活動の役割と授業構成」京都教育大学紀要 No.115 pp.169-181

佐藤喜美子(2012)「中学校国語科の書くことの授業改善」平成23年度山梨県総合教育センター 「書くこと」の指導の在り方研修会資料 p.8

ジム・カミンズ・著、中島和子・訳著(2011)「言語マイノリティを支える教育」慶應義塾大学出版会 p.33

三村真弓(2009)「言語力の育成をめざしたこれからの教科教育－音楽科授業における言語力とは何か－」日本教科教育学会誌 第31巻 第4号 pp.43-46

文部科学省(2008)「中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年9月）」教育芸術社

文部科学省(2012)「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【中学校版】」教育出版 p.8

文部科学省言語力育成協力者会議(2007)「言語力の育成方策について（報告書案）【修正案・反映版】」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryu/07081717/004.htm